

# 守ってあげられずごめん

## 津波で家族5人犠牲 石巻の今野さん

12年近くたっても自責の念は消えない。宮城県石巻市の今野浩行さん(61)は今日も仏壇の前に座り、亡くなった3人の子どもに「守ってあげられなくてごめん」と謝っている。2011年3月11日、津波が街を襲ったあの日から、今野さんの人生は大きく変わった。

### 後悔抱き続け生きる

長男の大輔君(当時12)と次女の理加さん(当時16)は、自宅(祖父母と共)に大輔君の帰りを待ち、家ごとの真山に逃げず50分近く校庭にとまり、川の堤防方向へ避難を始めた直後に津波に襲われた。大輔君が先生山さ逃げよう」と訴えたことは、後日、生存者の証言で知った。長女の麻里さん(当時18)を一度に失い、生きた心地が

出ている。明るい性格の麻里さん、しっかり者の理加さん、甘えん坊の大輔君。愛する子と両親

しなかった。口癖のように「死にたい」とつぶやくようになった。自ら命を絶つことも考えた。

実は震災前日の10日夜、出張帰りに買ったチーズケーキを家族で食べながら「避難場所」が話題に上っていた。9日に宮城県で最大震度5弱の地震があり、津波注意報が発令されたためだ。ただ、結論は出す曖昧に終わった。「真剣に考えておけば…」この後悔に余計に苦しめられた。

児童74人が犠牲となった大川小の問題は訴訟に発展し、周囲の声もあって原告団長になった。だが喪失感と重い責任のしかかり、インターネットでは「金目当て」との中

傷も目につく。酒に逃げて心身に不調を来し「団長を代わってくれ」と言ったこともあった。

何とか最後まで耐えられたのは、子どものためにも真実を解明し、悲劇を繰り返さないと思わなければならぬ。避難先を決めなかったことなど「自分がちゃんとすれば死なずに済んだのではないか」との思いは常にあった。ひとみさんは「子どもたちはお父さんのせいにしてない」と言ってくれたが、そうは思えない。後悔が原動力だった。

二審仙台高裁判決は学校側の事前防災の不備などを認め、19年に確定。この判決は、教訓を後世に伝えるための新たなスタートラインとなった。

自身が墓に入るまで心の傷は癒えず、後悔が消えることもない。ただ「死にたい」とは思わなくなった。子どもたちが生きたかった人生をひとみさんと歩むつもりだ。

「天国の子へ供養になれば」。3月11日は、大川小で竹灯籠に明かりをともす。



自宅の仏壇の前で取材に応じる今野浩行さん(左)と妻ひとみさん＝宮城県石巻市